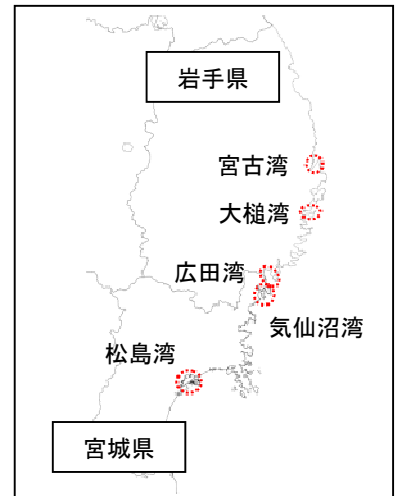


平成 23 年度 閉鎖性海域モニタリング調査結果 概要

1 調査目的

東日本大震災における巨大津波は、藻場、干潟等の生物の産卵・生育場を壊滅的に破壊し、さらに沿岸域の状況や海底地形が大きく変化することで、沿岸域における栄養塩の循環機構も震災前と大きく変貌している。特に閉鎖性海域では、その地形的特徴から今後の人間活動の変化に伴う汚濁負荷の影響を受けた水質悪化が懸念される。

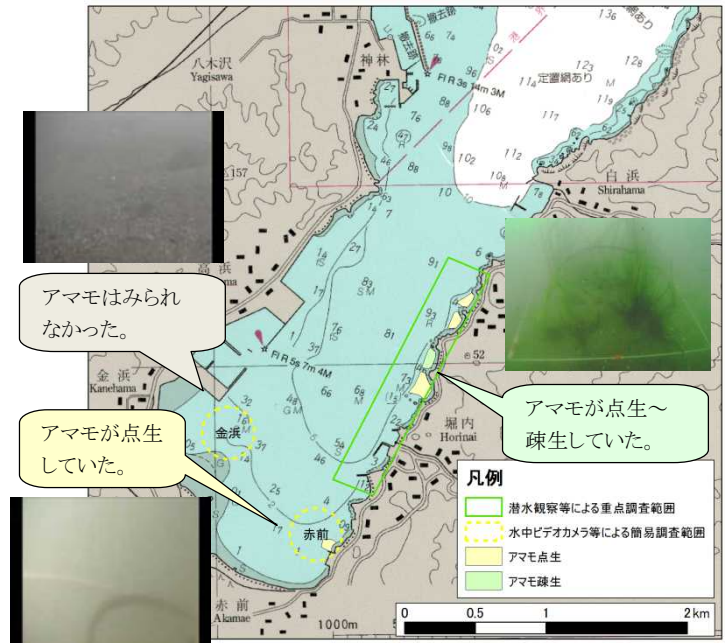
このため、震災発生以後の陸域からの汚濁物質の流入等によって、特に水質の悪化が懸念される被災地の閉鎖性海域（宮古湾、大槌湾、広田湾、気仙沼湾、松島湾）を対象に、水質浄化機能の高いアマモの分布状況を調査するとともに、その生息条件となる水域環境を把握するための水質、底質等の調査を実施することにより、今後の豊かで健全な海域環境の再生、保全に資することを目的とした。



2 調査結果概要

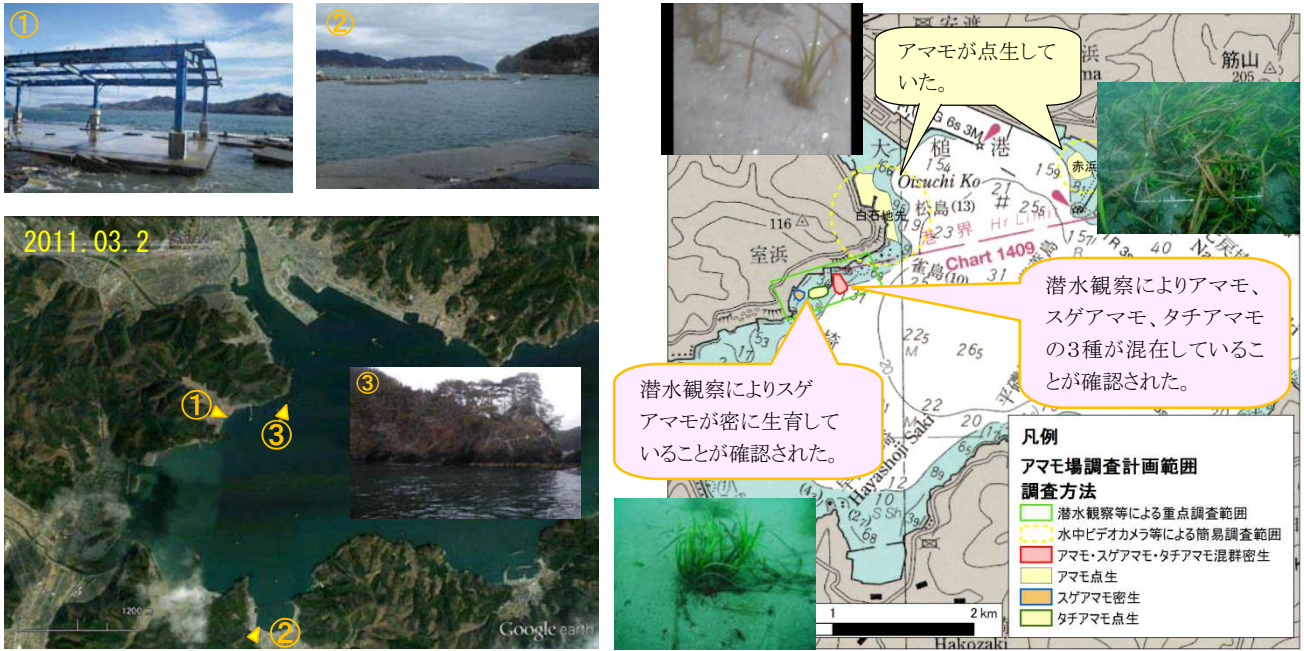
他機関によるアマモ場調査の結果として、東日本大震災で生じた津波による攪乱で大きな消失がみられるとの情報もあったが、本調査結果では、調査対象とした5つの閉鎖性海域すべてで、被災後にアマモが再生産していることを裏付ける実生（芽生え）や栄養株を確認することができた。また、水質等の調査等の結果からは、調査日前日の降雨の影響を考慮すれば、アマモの育成に影響を及ぼす水質の悪化等は確認されておらず、各海域ともに現状でもアマモ場を再生させる環境条件は有していることを確認した。各海域のアマモ場の状況は下記のとおり。

(1) 宮古湾



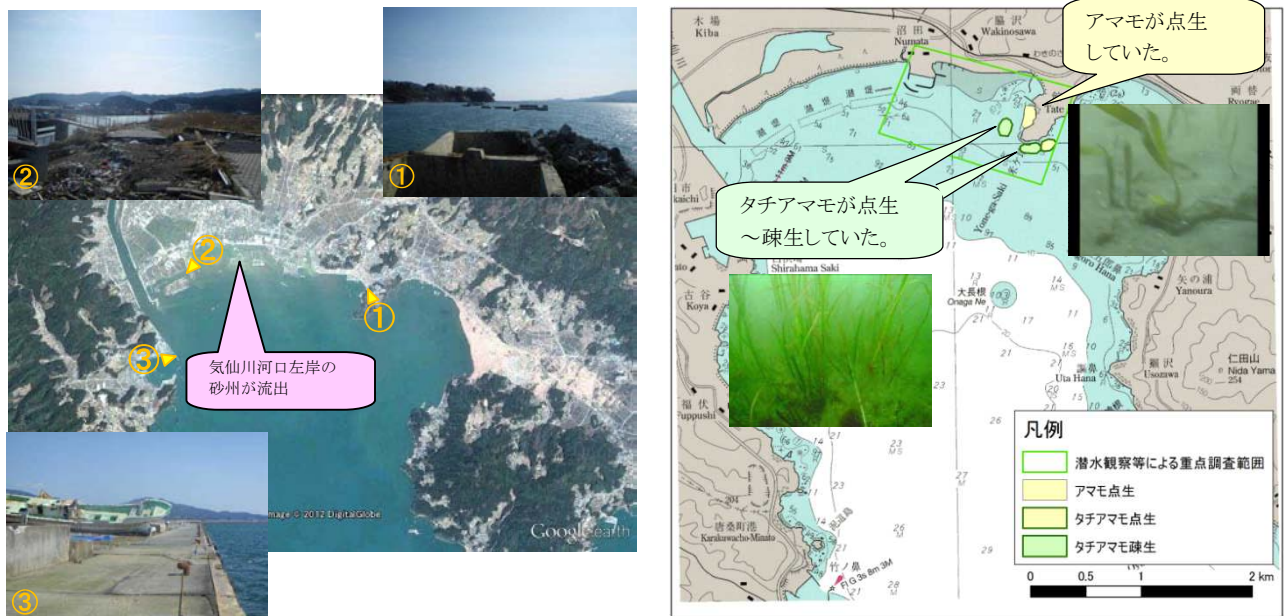
- 津波による海底の攪乱のため湾奥、南岸沿いのアマモ場は面積・密度ともに縮小したとみられる。
- 湾奥ではアマモは未確認。南岸のアマモ場はかつての分布範囲に点在しており、密度の低下を確認。
- 再生産の証拠である実生（芽生え）や面積拡大の元となる栄養株のいずれも確認された。底質は砂泥質で生息適地であることから、回復過程にあるとみられる。しかし、震災前の状況に回復するためには、かなりの年月が必要と推測される。

(2) 大槌湾



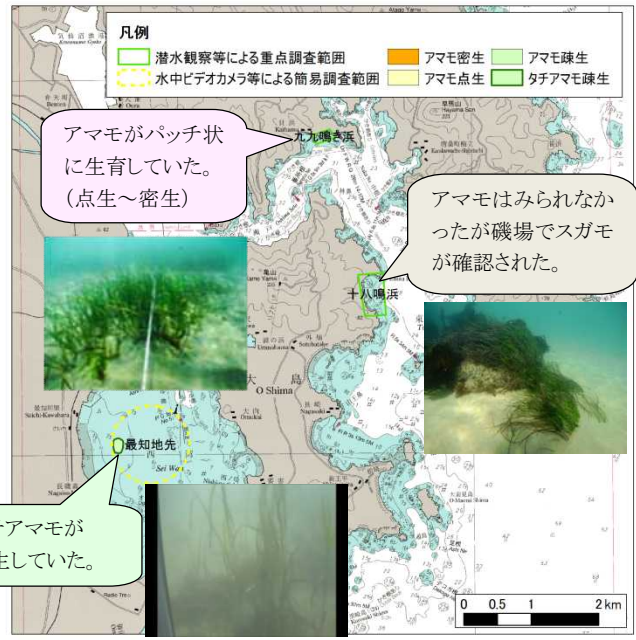
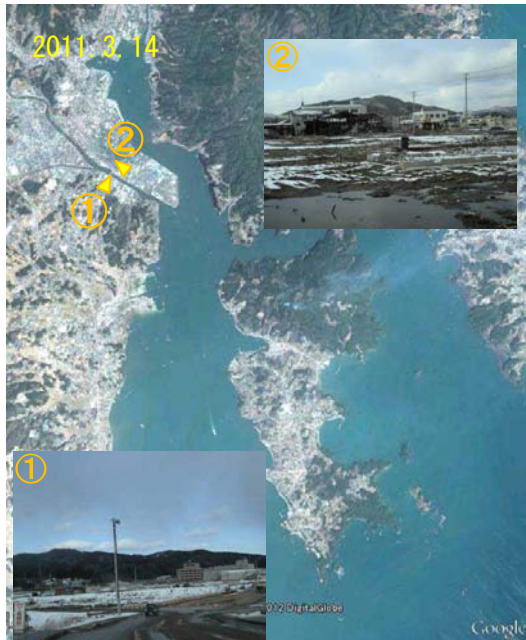
- 津波による海底の攪乱のためアママ場はほぼ壊滅し、ごくわずかに生残しているとみられる。
- 湾奥北部で密度のやや高い（密生）のアママ場を確認。スゲアママ、タチアママも確認された。
- 再生産の証拠である実生（芽生え）や面積拡大の元となる栄養株のいずれも確認された。底質は砂泥質で生息適地であることから、回復過程にあるとみられる。しかし、震災前の状況に回復するためには、かなりの年月が必要と推測される。

(3) 広田湾



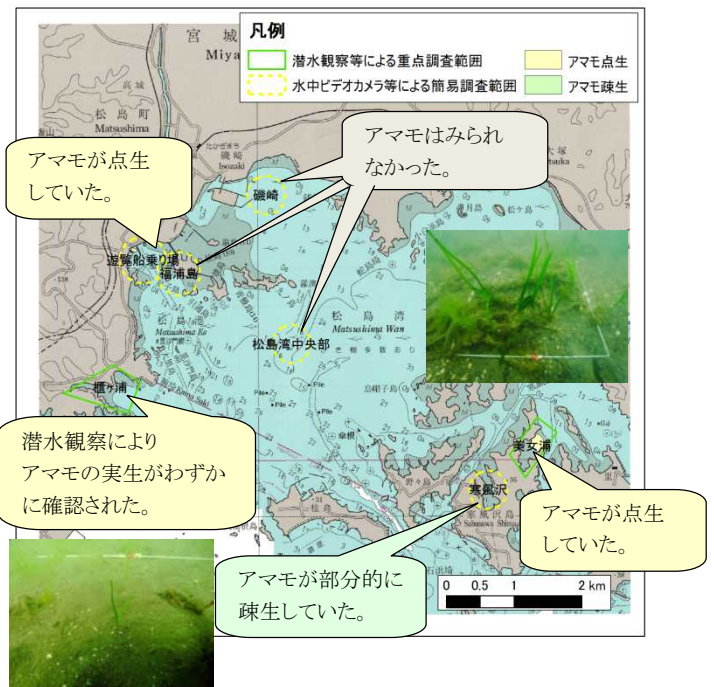
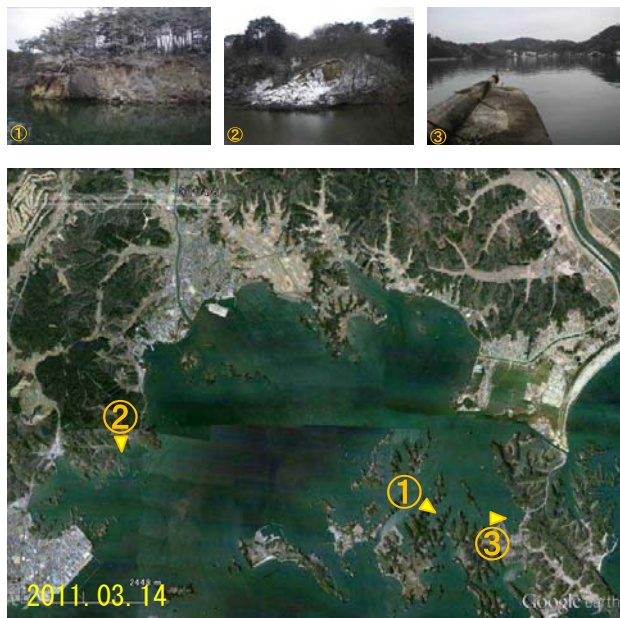
- 震災前の岩手県最大級のアママ場は、津波による海底の攪乱のため大きな被害を受けたとみられる。
- 米崎半島周辺ではアママの群落を確認。その西側海域ではほとんどみられない。タチアママも確認。
- 再生産の証拠である実生（芽生え）や面積拡大の元となる栄養株のいずれも確認された。底質は砂泥質で生息適地であることから、回復過程にあるとみられる。しかし、密度の低下が著しく、震災前の状況に回復するためには、かなりの年月が必要と推測される。

(4) 気仙沼湾



- 震災前にまとまったアマモ場の報告はないが、点在していたアマモ場は影響を受けたとみられる。
- 九九鳴き浜と最知地先では小規模なアマモやタチアマモの群落を確認。十八鳴浜ではスガモを確認。
- 再生産の証拠である実生（芽生え）や面積拡大の元となる栄養株のいずれも確認された。底質は一部を除き、砂泥質で生息適地であることから、回復過程にあるとみられる。

(5) 松島湾



- 津波による海底の攪乱のため、繁茂していたアマモのほとんどは底質ごと消失し、島陰や岬の波裏で、わずかにアマモ場が残存しているとみられる。
- 櫃ヶ浦ではアマモ場は確認されなかったが、美女浦などの湾内南岸の内湾域に残存。
- 再生産の証拠である実生（芽生え）や面積拡大の元となる栄養株のいずれも確認された。底質は砂泥質で生息適地であることから、回復過程にあるとみられる。しかし、震災前のような松島湾全体に広がるアマモ場に回復するためには、かなりの年月が必要と推測される。